



国際交流員カロリンのコラム

ベートーヴェン生誕 250 周年 250 Jahre Beethoven (250 ヤーレ ベートーヴェン)



皆さん、あけましておめでとうございます！

今年、2020年は東京オリンピック・パラリンピックが開催される特別な年ですね。でも、ドイツ人にとっては違った意味で特別な年なんです。

ドイツのクラシック音楽の作曲家、ベートーヴェンの生誕250周年を迎えるからです。2019年12月16日から2020年12月17日にかけて、ドイツだけではなく世界中で、ベートーヴェンの生涯や作品を讃えてお祝いが行われます。

ベートーヴェンは、1770年12月16日にドイツの西にあるボン市の音楽家の家に生まれました。子どものころから音楽を習い、特にピアノで才能を発揮しました。1792年には、ドイツの国歌を作曲したハイドンと一緒にオーストリアのウィーンに行き、作曲家として活動しました。同じウィーンに住んでいたモーツァルトとハイドンの影響を受けて、若いうちから革新的な曲を作りました。



18世紀の音楽にはルールがありました。例えば、曲の長さや、何が美しい音楽なのか。しかし、ベートーヴェンはそのルールにとらわれることなく、自分が良いと思う曲を作りました。やがて、彼が生み出す新しい音楽は、人々の心を掴んでいったのです。

1798年、ベートーヴェンに聴覚障がいが見られ、どんどん深刻化していきました。1824年の「交響曲第

九番ニ短調（第九）」の初演後の割れるような拍手を、彼はまったく聞くことができませんでした。彼は、自身の聴覚障がいを「音楽家として最悪の運命」と表現し、うつ病になってしまいました。

第九は傑作になりました。最後の楽章での合唱曲は、世界で最も多く演奏された曲だと言われています。

歌詞は、ドイツ人の詩人、シラーが書きました。「歓喜の歌」(Ode an die Freude、オーデ アン ディー フロイデ)の内容は難しいですが、「この世界で最も尊いことは、喜びを分かち合うことだ」といっています。

日本で初めて第九が演奏されたのは、1918年、徳島県の旧板東町（現鳴門市）でした。鳴門市は、ベートーヴェンをきっかけにドイツとの強い縁が生まれ、1972年から毎年、第九が演奏されています。



鳴門市のドイツ館

第九の他にも、映画やテレビでよく使われているベートーヴェンの曲がありますね。例えば、力強い「運命」、思わず踊りだしたくなる「エリーゼのために」、神秘的で悲しみを誘う「幻想曲風ソナタ」があります。私は、こういう曲を聴くと感情があふれて、思わず鳥肌が立ちます。耳の聞こえない人が作曲したなんて信じがたいですね。

ベートーヴェンの人生は辛いものだったかもしれませんが、250年たった今でも、彼の作った曲は世界中で愛されているし、国境を越えて人々を結びつける力があると思います。

ティーパーティーを開催します

市国際交流協会では、在住外国人の方との交流会としてティーパーティーを開催します。

今回のテーマは「日本」です。日本の冬の定番、こたつに入って、おもちを食べたり、かるたで遊んだりして交流します。浴衣の体験もあります。

日本人、外国人は問いません。皆さん、ぜひお越しください！

- 日時 1月19日(日) 午後1時～3時
- 場所 薬師寺コミュニティセンター
- 参加費 100円(当日集金)
- 定員 20名
- 申込期間 1月6日(月)～10日(金)
- 申し込み・問い合わせ先
市民協働推進課 ☎(32)8887

※ママパパ English については、39 ページを check !



TAKE FREE

広報しもつけを設置してくださるコンビニエンスストアなどのお店を募集しています。ご協力いただける場合は総合政策課 ☎(32)8886までご連絡ください。

PC・スマホ
市ホームページ

